

審査を終えて（中学校の部）

平成30年3月12日 本部書写委員会

学年	諷	審査員からのコメント	
中学校 一年	永	永 久 平 和	<p>① 3～4画の呼応と五画の変化</p> <p>△ 3画目の左払いの先が斜め下に向かっていて、4画目に連続していかないものが多くありました。左払いの先端で筆を止め、次の画に向かってαの動きで軽くはね出すように筆を動かすとよいです。</p> <p>△ 5画目の右払いが楷書のようにしっかりと払い出しているものが見られました。行書の特徴を習得するねらいがあるので、払いの部分は穂先をまとめながら軽く止め、左下へ折り返すように筆を動かすとよいです。</p>
	久		<p>② 1～2画の連続と2～3画の呼応</p> <p>○ 1～2画目の連続はよくできていましたが、戻しすぎたり、一度離してあらためて書いたりしたように見えるものがありました。</p> <p>△ 2～3画目の呼応について、左払い部分は「永」の左払いと共通の傾向が見られました。3画目については、左払いを書いたら、αの動きでそのまま一気に3画目に入ります。そのため、3画目の起筆部分はとがった形になります。</p>
	平		<p>③ 2～3画の呼応と3～4画の連続</p> <p>○ 2～3画目の呼応は、よくできていました。片仮名の「ソ」を連続させる感じで書くとよいです。</p> <p>△ 3～4画の連続については、3画目を払った後、筆先を硯で直したりせず一気に4画目に入るように書くとよいです（ジグザグの途中の線が一部消えたようなイメージ）。</p>
	和		<p>④ 4～5画の省略と7～8画の連続</p> <p>○ 4～5画の省略はほぼできていましたが、つくりの「口」に向かって払い上げるところが「止め」になっている作品がありました。片仮名の「レ」を斜めに書く感じで書くとよいです。</p> <p>△ 7～8画の連続で、最終画を書く際に一度筆を離して、片仮名の「マ」のように点を打つ作品が多くありました。数字の「2」を書くつもりで書くとよいです。</p>



△左払いが斜め下に向かっている。

△右払いが楷書のように抜いている。



△写真左：横画と左払いが連続していない。

△写真上：2～3画が呼応していない。











△3～4画が連続していない。



△のぎへの最終画が止めになっている。

△「口」の部分の最終画を一度離して書いている（ように見える）。

学年	語句	審査員からのコメント	
中学校 二年	温故知新	温	<p>① 2～3画の連続と「皿」の縦画の連続感</p> <p>○ 2～3画の連続はおおむねできていましたが、「にすい」のように見える作品もまれに見受けられました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2～3画は元々は二つの画が連続しているという意識をもって、2画目の始筆があまり細くなりすぎないように書くとよいです。 ・ 「皿」の縦画は筆の動きが自然に次の画につながるように書くとよいです。また、縦画が等間隔で下がやや狭いと形が整います。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>○ 次の画へのつながりがある</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>△ 次の画へのつながりが見られない</p> </div> </div>
	温故知新	古	<p>② 4～5画の連続と8～9画の呼応</p> <p>△ 4～5画が連続しておらず、筆をつき直してカタカナの「マ」のようにになっているものが多かったです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 8画目は左斜め下にまっすぐ払うのではなく、丸みをおびてやや上に向かって払い9画目の始筆に入ります。穂先が大きく次の画に向かっていく動きを練習するとよいです。書いた後、8～9画が点線で自然につながるかどうかを確認するとよいでしょう。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>○ 8～9画が点線につながる</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>△ 楷書のように書いている</p> </div> </div>
	温故知新	知	<p>① 2～3画の連続感と4～5画の呼応</p> <p>△ 2～3画へのつながりがあまり見られない作品が多かったです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4画目の払いの方向は5画目へ自然につながるよう大きく円を描くつもりで筆を動かすとよいでしょう。5画目の位置が下がりすぎると、バランスが悪くなります。また「口」の最終画はカタカナの「マ」のように下がるのではなく、数字の「2」を書くような感じで横に引くと字形が整います。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>○ 「2」のように最終画を横に引く</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>△ 4～5画につながらない</p> </div> </div>
	温故知新	新	<p>④ 8～9画の省略と10～12画の連続</p> <p>○ 8～9画の省略は概ねできていました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 9画目は止めずに、つくりの上部に向かって右斜め上にはねるように書くと更によくになります。 ・ 10～12画は一気に書きます。10～11画がつながるように、11画の終筆で止まったらそのまま上に戻るような感じで12画の始筆になるように書くとよいでしょう。また、12画を右から左に書いている誤字が見受けられました。筆順や筆の動きを確認してから書くとよいと思います。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>△ 10～11画につながらない</p> </div> <div style="text-align: center;">  </div> </div>

学年

語句

審査員からのコメント

中学校三年

神秘探究

神秘探究

神

①「ネ」の筆順・形の変化と「へん」から「つくり」への連続感

・ 2画目と3画目を離しすぎないようにするとよいです。特に、2画目の「折れ」の近くから書けるとよいです。

△「へん」から「つくり」に連続するとき、はね上げずに止まっている作品が見られました。「つくり」の1画目に自然につながっていくとよいです。

・ 「へん」と「つくり」がくっつきすぎると全体に左に寄ってしまうので注意が必要です。



秘

②4～5画の省略と「必」の点画の連続感

○ 4～5画の省略はできているので、4画目の「はね」が2画目の縦画から右側に出るように書くとよいです。

△「必」の連続感で1～2画への連続はよくできているが、2画～3画、4画～5画への呼応が見られない作品がありました。特に、3画目の「はね」が大きすぎるもの、4画目とは違う方向にはねるものなど、連続感がとぎれてしまう作品が多かったです。一気に書けるとよいです。



探

③6～7画の変化と9～11画の点画の連続感

○ 7画目の変化はよくできていました。6画目の形に気を付けてほしいです。

・ 9～11画の連続感では、「木」の3画目のはらう方向が鍵となります。下向きにはらうのではなく、αの動きで左上にはらい、4画目につながるように書いてほしいです。



究

④1～3画の連続感と6～7画の連続感

△ 1～3画の連続感が見られない（1画目が止まっている、2画目と3画目が離れているなど）ものが多く、全体的には行書らしく書いているにも関わらず、ここで△になってしまう作品があり、残念でした。

△ 2画目をはらってしまって誤字となる作品もありました。

△ 「九」の2画目～3画目への連続感を表すために、一端筆を上げてから横画につなげようとしている作品がありました。直接連続しなくても、一気に書いていることが分かればよいです。



⑤全体のまとめ・筆勢について

- 名前の位置や字の大きさが適切な作品が多かったです。
- つなげて書こうとする意識をもって書いている作品が多かったので、筆勢が感じられる作品が多かったです。
- △連続するところが次の点画に向かっていない部分が見受けられました。行書の「連続感」は点画から点画への気持ちのつながりをもって書くことが大切です。気持ちのつながりが自然な連綿線として表れるとよいと思います。実線でつながっていない部分は、点線で自然につながるかを意識して書くようにするとよいと思います。
- △字によっては横広がりになって中心がずれて見えたり、最後の文字が小さくなってバランスを崩したりしている作品がありました。清書でも紙を折って書きましょう。

<全体を通して>

- ・全体にはよく練習をしているし、行書らしく書いている作品が多かったです。
- ・2年目ということもあり、ポイントを押さえて指導されている学校が多かったです。
- ・名前も含めて全体的に素晴らしい作品が多かったです。練習の最初に観点や筆順を確認することで、誤字がなくなると思います。各校でのご指導をお願いします。
- ・「永・久」の左右の払いや「和」の「口」の部分など、行書の筆の動きが見えにくいところは、YOUTUBEの動画を是非御覧になってください。※動画は書写委員長が個人的に制作しています。教材や教材研究として御活用ください。
- ・墨色が悪い作品があった。濃い黒の墨を用いた方がすっきりと強い線に見えるので、自分の使っている墨を確認してほしいと思います。
- ・敷き写しや骨字、籠字、二度書きなど、作品として不正なものが、例年に比べて少なかったものの、ありました。敷き写しは練習の段階でやるのはよいと思いますが、作品として出品されても、自力での作品ではないために審査できません。冬休みの宿題で、家で書く時に敷き写した作品を生徒が提出し、教科担任の先生がよく確認しないで出品してしまったという事例がありました。中には、手本を拡大コピーして敷き写していると思われる作品もあります。審査側としても非常に心苦しいのですが、これらの作品については無印の対応としています。出品前に、手本に作品を重ねてみたり、手本を横に置いて確認したりし、作品として正しいものを出品するよう、御協力をお願いいたします。

<事務手続きに関するお願い>

- ・作品を出品する際に、名簿の名前の漢字について、正しいか今一度御確認ください。また、外字は外字と分かるように、赤字で表示してください。認定証を各校へ届けた後、児童生徒に渡してから間違いが分かることが複数校でありました。
- ・認定証は教科書体に準じたフォントで印字しています。また、会長賞は、教科書体を踏まえ、手書き文字の一般的な字体で揮毫しています。しかし、複数校から「印刷文字の字体と認定証（会長賞賞状）の字体が異なるので、書き直してほしい」という依頼がありました。これについては、常用漢字表の付表2「字体についての解説」第2「明朝体と筆者の楷書との関係について」で、「…（前略）字体としては同じであっても、1、2に示すように明朝体の字形と筆者の楷書の字形との間には、いろいろな点で違いがある。それらは、印刷文字と手書き文字におけるそれぞれの習慣の相違に基づく表現の差と見るべきものである（後略）…」とあり、筆写の楷書ではいろいろな書き方があることを認めています。また、平成28年2月29日文化審議会国語分科会報告「常用漢字表の字体・字形に関する指針」（別紙参照）でも「手書き文字と印刷文字の表し方には、習慣の違いがあり、一方だけが正しいのではない」「字の細部に違いがあっても、その漢字の骨組みが同じであれば、誤っているとはみなされない」と示されています。これらのことを踏まえて当会でも印字や揮毫をしておりますので、字体例に示されている文字（または字体例が援用できる文字）については書き直しをしないことを御理解ください。